

説教 『新たな生命のヴィジョン』山本 護 牧師  
聖書 ホセア書 6：1～3／ローマの信徒への手紙 4：23～25

「二日の後、主は我々を生かし、三日目に、立ち上がらせてくださる。我々は御前に生きる(ホセア 6:2)。「おっ、復活のことか」。預言者が未来のキリスト復活を言い当てたというより、伝えられていた預言によって弟子たちに「十字架の意味」が啓かれた、と解せよう。復活は、十字架なしにありえない。

「さあ、我々は主(Yahwe 神名)のもとに帰ろう。主は我々を引き裂かれたが、いやし、我々を打たれたが、傷を包んでくださる(6:1)」。歴史背景としては、大国アッシリアに蹂躪され、属州化している事情がある(5:13)。人間の限界、つまり苦しみ of 不可能性の中で、預言者は民を目覚めさせ、転換して神に帰れと促した(6:1)。神は民を裁くことなく、転換する者たちを辛抱強く待っておられた(5:15)。

十字架と復活もまた、人間の不可能性において見出される。「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた(ロマ 4:25)」。人間の罪を清める十字架、そして清められた者を義とする復活。そんなことがどうしてありえるのか。イエスは生前、天国を比喻で語り(マタイ 19:23~24)、弟子たちは「それでは、だれが救われるのだろうか(19:25)」と否定的に応じた。イエスは弟子をじっと見つめ、「それは人間にできることではないが、神はなんでもできる(19:26)」と念を押した。厳かに、はっきりと語ったのだが、弟子たちにはまるで理解できなかった(19:27)。

私たちは、「なんでもできる神」への信仰をどれほど自分の支えとしているか。「わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、わたしたちも義と認められる(ロマ 4:24)」。これは「アブラハムのためだけに記されているのではなく、わたしたちのためにも記されている(4:23b~24a)」。アブラハムは何をしたか。「彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じた(4:18)」。

信仰とは、アブラハムのように構えること。人間の不可能性における希望。見通しがなくとも、素朴に、誠実に「なおも望みを抱いて、信じる(4:18)」こと。アブラハムやパウロが特別な人物だからではない。アッシリアに蹂躪された民のように、私たちにも悔い改めによる転換は起こる。

罪を清める十字架、私たちが義とされる復活(4:25)。この二つが、全世界の教会と、全キリスト者の中心だ。唾然とするほど荘厳なカテドラルでも、草で葺いた礼拝堂でも、生じるキリスト讃美に段差はない。2016年、八ヶ岳山麓では「降り注ぐ雨(ホセア 6:3)」によって信仰が芽を吹いている。小さな伝道所の中心もまた十字架と復活のヴィジョン。このヴィジョンは、故郷を破壊され、追われた民の心においてはよりくっきりと描かれ、「存在していないものを呼び出して存在させる(ロマ 4:17)」。

「我々は主を知ろう。主を知ること追求めよう。主は曙の光のように必ず現れ、降り注ぐ雨のように、大地を潤す春雨のように、我々を訪れてくださる(ホセア 6:3)」。私たちの錆びついた扉を内側からこじ開け「大地を潤す春雨」を、新たな生命のヴィジョンを迎え入れよう。「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた(ロマ 4:25)」。委縮するな。十字架で罪は赦され、復活で義とされるのだから。私たちには無理でも、神はなんでもできるのだから。



【おまけのひとこと】

自分に始末できる範囲では見つけにくい また数に頼る傲岸な無力にもそれは映らないだろう  
十字架と復活のヴィジョン 世をつなぐ無辺の広さ 個々人の存在を支える深さで 揺らいでいる